潮木守一著

『世界の大学危機　新しい大学像を求めて』

（中央公論新社，2004年，238頁）

大場　　淳（広島大学）

本書は，著者である潮木守一氏が，桜美林大学大学院の大学アドミニストレーション課程の通信課程用のテキストとして書かれたものに編集を加えて，新書として出版されたものである。本書の狙いは，「将来大学アドミニストレーターを目指す人々に，最小限知っておいてもらいたい欧米の大学の歴史を紹介することにある」とされ，19世紀初頭から現代までのイギリス，ドイツ，フランス，アメリカの四か国を対象としている。

本書は通史ではない。上に述べた本書の狙いに沿って，著者は，20世紀後半に高等教育が拡大した結果全ての国が直面した課題として四つの問いを設定し，取り上げた四つの国と日本の高等教育を題材として検討する。そして，それらの問いを中心として，読者とともに今後の大学の在り方を考える素材を提供することとしている。著者によって設定された問いは以下のようなものである。

①多額の資金を投入した既存の大学は，新しい知識社会の中で役割を十分に果たせるのか。もし新たな大学像が求められなければならないとしたら，それはどのようなものなのだろうか。

②大学教育は広く普及されなければならないが，同時にそれは卓越性を目指さなければならない。大衆化の中での卓越性の追求とは，具体的にどのようなことなのか。

③労働生産性が向上した結果，社会全体としての自由時間が増え，働くべき職場を見出すことができず社会的な居場所を失った青年層が増加した。大学はそうした青年層のために新たなカリキュラムを開発し，新たな学習のスタイルを考えなければならないが，それはいかなるものか。

④政府税収が伸び悩み，歳出が見直される中で，拡大した高等教育の経費を，いったいだれがどれほどの割合で，いかなる方式で費用を負担すべきなのか。

いずれの問いも，答を出すのが非常に難しい問いである。著者は，第1章から第4章において，古典的な大学教育を維持しようとする努力が払われているとしてイギリスを最初に取り上げ，次いで近代大学が発足したドイツ，そして，エリートと大衆を分離した二元制度を有するフランス，最後に，最も成功した実験結果としての大学院が誕生したアメリカを取り上げて，設定した問いを巡って注目すべき制度や出来事等を記述する。もちろん，そこからすぐに問いへの回答が出てくる訳ではないが，ユーモアと機知を交えながら読者を惹きつける興味深い記述の連続である。例えば，フランスを例に挙げれば，サルトルとボーボアールに始まり，学校教育制度と大学，1968年の大学紛争，学生の大学運営や政治への参加，左右両政権による大学改革の失敗，ポチョムキン大学（見せかけだけの中身のない大学），大学教育の職業化，エリート養成校としてのグランド・ゼコル，グランド・ゼコルと大学の格差と社会階層，そして，新たな試みとして短期職業教育を取り上げている。著者はあとがきで「よその国の話や，今から二〇〇年も昔の話のなかに，現在われわれが当面している問題の種が，すでに蒔かれている」と述べているが，これらの章でその実例を幾つも挙げていることは実に興味深い。比較研究や歴史を学ぶことの重要性を改めて認識させてくれる。

第5章は，「大学拡大政策の背景」と題して，取り上げた四つの国に関する前章までの記述を踏まえ，日本とも比較しながら，大学拡大を推し進めた諸要因について解説する。そして，それに対応して採られた政策を教育機会均等と社会階層，生涯学習の観点等から比較分析し，設定された問いに対して具体的な課題（大学段階の学習をどのように設計するか）を抽出していくものである。また，本章は，最初に設定した問いのうち，必ずしも十分とは言えないものの，国公立大学や私立大学の問題等を取り上げる中で④の費用負担についての答えを示していると考えられる。

最後の第6章「知識のディズニーランド」は，表題からは内容を想像し難いが，前章で抽出された課題に答える本書の結論の部分に当たる章である。大学の「学校化」とその対に当たる「脱学校化」が同時に進行する中で，行き場の無い若者のために教育を行うのに大学や社会がどのように工夫してきたか，また，学校外の教育機会が

拡大してきている状況を解説し，成人教育や短期職業教育を取り上げつつ，大学教育の在り方について著者の考えを述べたものである。著者は，これからの大学像として，「人々が年齢に関係なく，それぞれの必要に応じて学べる，そういう学習空間に大学は変化してゆくはずである」と述べ，こうした空間を「成人のための学習センター」，これを言い換えて「知識・技能のディズニーランド」と表現するのである。そして，これは設定された問いである居場所を失った青年層の学習スタイル，大学の大衆化と卓越性の追求，更には知識社会における大学の在り方への回答でもあろう。

本書を読んで感じるのは，問いに対する一つの回答が得られた満足感よりも，むしろそれへの取り組みが如何に難しいかへの理解ではないか。もちろん，最初に設定した問いに対して，新書である本書が実証的に回答を示すものではないし，詳細に答が記述されている訳でもない。そもそも，そうした目的を本書は当初から予定しておらず，読者とともに考える素材を提供すると著者が言う所以である。

本書では，おそらくは高等教育の初学者であろう者や実際に高等教育の運営に携わる者を中心とする読者のために，更に学習できるよう巻末に参考文献の一覧が添付されている。本書をきっかけとして，著者が設定した問いや山積する高等教育の課題に一人でも多くの人が取り組むようになることを期待したいものである。